

4 歳児の園生活での仲間関係の発達に関する研究

松丸英里佳*・吉川はる奈**

キーワード：仲間関係、4 歳児、観察調査、発達過程

I 問題と目的

1 幼児期の子どもにとっての仲間関係

幼児期は、子どもにとって、幼稚園や保育所という社会集団へはじめて参加する時期である。家庭と異なる場で、家族から離れ、クラスという場で、初めてのメンバーと時間を過ごす。物理的環境としても、人的環境としても、初めての体験である。園という社会集団の中で仲間と出会い、周りの支えを得て、仲間関係を形成していくことは、幼児期の課題のひとつであり、学童期以降の仲間集団形成へ向けた基盤となると考えられている。

“仲間”とは、自分と年齢が近く、身体的にも心理的にもまた社会的にも類似した立場にあるものである。幼児期における仲間との相互交渉が、子どもたちの社会的な力の発達に果たす役割としては、①他者理解・共感、②社会的カテゴリーの理解、③社会的規則の理解、④コミュニケーション能力、⑤自己統制能力などがあげられている。

生涯発達の視点で子どもの仲間関係を捉えると、仲間との様々なやりとりの中で、対人関係の基盤を培うのが幼児期であり、幼児期の仲間関係の発達を捉えることで、児童期の対人関

係の困難さを乗り越えていくための示唆を得ることも期待できる。

2 3 歳児の姿にみる仲間とであう経験の意味

松丸ら(2009)は幼稚園において3歳児が友だちとであい、仲間関係を形成していく過程について報告した。継続した観察の中で、3歳児は保育者との関係形成で、気持ちを安定させていることが明らかになった。特に保育者のことは、表情、保育者との接触など、保育者が、直接子どもに与える働きかけが、子どもの泣きや落ち着かない姿を驚くほど落ち着かせ、不安な心的状態が解消されていく様相が、入園当初の期間に観察されていた。その後、友だちに関心をもち、近づき、対立するようになっていくプロセスがみられた。「友だちに関心をもつ」「友だちに近づく」「友だちと対立する」のうち、特に「友だちに近づく」過程は観察の中で長期にわたってみられた姿であった。「関心をもつ」だけでなく、「近づいて」相互にかかわろうとする姿である。仲間として認め合い、互いに理解しあう土台として、生活の中でさまざまな仲間と出会い近づく。3歳児の仲間関係の形成過程では、このようにさまざまな「仲間とであう、近づく」経験が積み重ねられていく姿をとらえることができた。

* さいたま市立辻小学校

** 埼玉大学教育学部家政教育講座

3 4歳児の園生活における仲間関係の発達

一方4歳児は、自分と異なる他者の特性に気付き、また他者と異なる自分への気づきを経験するといわれる。そこで本稿では、3歳児の姿にみられた「仲間とであう」経験がどのように、仲間関係を発達させていくのかを明らかにしたい。また児童期になると、それまでの仲間関係に大きな変化が生じ、偶発的な相互交渉を超えた、持続的な関係をもつ友人関係が出現するといわれている。幼児期の園生活の中で仲間関係を発達させる姿を明らかにすることを通して、児童期以降の対人関係の発達と支援についての示唆をえたい。

II 方法

1 対象

A市内の公立幼稚園4歳児クラスに在籍する幼児（以下4歳児）27名

3歳児、4歳児を対象として行った研究のうち、本論では紙面の都合上、4歳児の結果について考察を行う。3歳児の結果については、松丸ら（2009）に報告している。

2 方法

日常の保育の場面で生じる仲間関係の観察を継続的に行った。観察記録は観察者がその場でフィールドノートに記録した。観察で記録したフィールドノートを解釈的に読み解きながら、エピソードとして文章化し、それぞれについて省察を行った。省察については、観察を重ねながら日を置いて何度も見直しを行った。また定期的に保育者の確認を得ることで、恣意的な偏りが無いよう検討した。

3 期間

2007年5月～2008年2月 週1回

III 結果と考察

1 分析過程と結果

観察では全37のエピソードを得た。それぞれのエピソードについて考察を行い、それに基づいてタイトルを付けた（表1）。エピソードの内容から、4歳児の仲間関係の発達過程の特徴として①友だちと一緒に遊ぶよさを味わう、②友だちと対立する、③自分の遊びに夢中になる、④友だちの魅力に気付く、⑤認められたい気持ちをもつ、の5つのカテゴリーが挙げられた（表2）。

以下では、各カテゴリーの特徴について具体的なエピソードを取り上げながら、4歳児の仲間関係の発達過程について考察する。

2 4歳児の仲間関係の発達過程の特徴

①友だちと一緒に遊ぶよさを味わう

4歳児では、1年を通して友だちと一緒に遊ぶことがとにかく楽しくて仕方ないという子どもたちの姿がみられた。自分と気の合う、仲良しの友だちに囲まれて遊ぶこと。友だちと遊ぶことで、ひとりではできないダイナミックな作品ができたり、イメージを伝え合うことで遊びが発展するなど、遊びの質が高まり、遊びが充実すること。また、遊びながら相談したり、おしゃべりをしたりすることで、友だちの気持ちを受け止め、自分の気持ちが受け止められ、心が通じ合う心地よさを味わうこと。このように、友だちとの遊びは、子どもたちに「楽しい」「うれしい」「心地よい」といった、快の感情をもたらすようである。

友だちと一緒に遊ぶことへの肯定的な感情は、仲間関係の土台となると考えられる。友だちと遊ぶことで楽しい、うれしい気持ちになることは、友だちとの遊びに期待をもって取り組み、友だちと意欲的にかかわろうとすることへ繋がるだろう。この時期の子どもたちの心を自発的に動かすのは、おもしろさや楽しさ、よろこびといった、快の感情であるということを変えて

表1 エピソード一覧

No.	タイトル	カテゴリー
1	仲良しのA男と離れたくないK介	2
2	K太の仲間入りを断るY男とN介	2
3	「わあ！」友だちの完成を一緒に喜ぶA子	4
4	「○○ちゃんが悪いんでしょう」気持ちを表したH美	2
5	「下手くそ」と言われてくやしいO介	2
6	3つ子ちゃんになりきって遊ぶK美、R子、M香	1
7	「いまのどういうこと？」気持ちが伝わらなかったI実	2
8	「みんなに配ろう！」作ったものをみんなにあげたいK花	1
9	友だちの邪魔をしたE美	2
10	「同じだね！」同じものを持っていてうれしいH子	1
11	「こうしてこうしてくださいね」友だちに教えてあげるM美	1
12	「おれも！」友だちのまねをして作るS斗	1
13	「こう？」イメージを伝えて友だちと一緒に作るS香	1
14	「せんせいって、書いたよ」じっくりと取り組むM彦	5
15	「強そうだなー」作り方を教えてもらったK介	1
16	それぞれの役割でごっこ遊びに参加する4人	3
17	自分のイメージを形にして満足感を味わうG太	3
18	「もう1回踊ろう！」同じ動きが楽しいY代	1
19	「ひとりでやりたいの！」最後まで自分でやりたいA美	3
20	「ぴーって、かわいいー」作りながらおしゃべりを楽しむN也	1
21	「かわいいね」友だちの作品をほめるS奈	4
22	ごっこ遊びの中でおしゃべりを弾ませるK実とY子	1
23	ふたりの世界をゆったりと楽しむE美とI子	1
24	手伝ってもらいながら友だちと一緒につくるY美	1
25	「Sちゃんがくれないよー」先生と一緒に気持ちを伝えたK美	2
26	「おれ切れないんだー」友だちに手伝ってもらったY斗	1
27	「2人でやろう！」一緒に演奏するO介、H実	1
28	「おにのうんちはどんな形？」H花の歌に魅かれたM代	1
29	「前にやったことあるよ！」教えてあげたいC子	3
30	どうしてもマナフィーになりたいT輔	2
31	G太の作品に魅かれてみんなで作る	4
32	「Aちゃんがんばってー！」友だちを応援するN夫	4
33	「ゼリーおなじだー」お弁当の中身が同じでうれしいF子	1
34	「Oくんでいい？」「じゃあバスちょうだいね」相談して決める2人	1
35	自分で発見した駒の回し方を見てほしいJ也	5
36	「使いたいひとー？」みんなで使えるようじゃんけんするN男	1
37	「Kくんのこと大好きだからね」貸してもらってうれしいM義	1

表2 カテゴリー分類

カテゴリー分類	カテゴリー数
①友だちと一緒に遊ぶよさを味わう	19
②友だちと対立する	8
③自分の遊びに夢中になる	4
④友だちの魅力に気付く	4
⑤認められたい気持ちをもつ	2
合計	37

認識しておくことは重要である。

友だちとの遊びという視点から、3歳児からの質的变化に着目すると、友だちとの共有を楽しむ場面では、3歳児に引き続き、友だちと“同じ”ということに対する、うれしい、楽しい、というプラスの気持ちをたっぷりと味わっていくが、4歳児ではさらに、共有を楽しむことを遊びの中に取り入れる姿もみられるようになる。

また、観察では、3歳児でもみられた友だちとおしゃべりする場面において、3歳児と比較しておしゃべりの継続時間が増え、話の質も発達していることが伺えた。クラスの集団から少しはなれた所で2人きりでおしゃべりする姿もみられ、仲良しの友だちとふたりだけの空間で、ゆったりとおしゃべりを楽しみたいという気持ちが芽生えていると考えられる。

友だちと一緒に遊ぶことで遊びが発展し、充実した遊びが友だちへの思いを育む。4歳児は、このような経験を繰り返すことによって、楽しいという感情と共に、仲間関係を発達させていくと考えられる。

カテゴリー① 友だちと一緒に遊ぶよさを味わうエピソード

No.6 「3つ子ちゃんになりきって遊ぶK美、R子、M香」（4歳、女児）

K美、R子、M香は、一本の縄を並んで持ち「やーゆ、やーゆ、やーゆ」という元気な掛け声とともに行進しながらろう下へやってきた。観察者の前で止まると、両手をくるくる、そのまま手のひらを自分のほっぺたにあて、「くるんぱ!」といいながら、1人が始めた独特の動作をみんなでもねする。再び「やーゆ」の掛け声が始まる。今度はげんこつやまのためぬきさんを「やーやー」で歌い、あまりのおかしさに笑い合う。K美から、「おひるねしよう!」という提案が出されると、3人並んで横になり、

寝転がったまま「やーゆ」の掛け声を始める。

「おもしろいねえ、なにごっこなの?」とたずねると、「3つ子ちゃんだよ!」と教えてくれた。

(省察)

3人は、“3つ子”というイメージを共有しながら遊んでいる。それは、どこへいくにも一緒に、何をするのも同じ、というものであった。普段から気の合う仲良しの3人ならではの、友だちと“同じ”ということを楽しめることができる遊びをつくりだしたといえる。縄を通して、歌を通して、動きを通して、3人は仲良しと同じでうれしい、楽しい気持ちを共有しているようだった。

②友だちと対立する

4歳児では、友だちと思いがぶつかり合う場面が多くみられた。集団遊びの中で、自分の使いたい道具を巡る対立や、ルールを巡る対立、また「下手」と言われたことからぶつかり合うこともあった。子どもたちの「こう遊びたい」思いや、自分なりに一生懸命取り組んだ経験は、子どもたちの遊びに対する思いを育て、それはやがて誰にも譲れない気持ちとなり、時に対立を引き起こすと考えられる。一方、遊びの中で友だち関係に関する対立も多くみられた。一緒に遊びたい友だちができる一方で、一緒に遊びたくない友だちの存在もみえ始め、頻繁に仲間入りのいざこざがみられた。

仲間入りを断られた子どもは、諦めて別の場所でも仲間を探すこともあれば、わざといじわるをしたり、またどうしても入れてほしくて、様々な工夫を凝らしながら何度も仲間入りに挑戦していく姿がみられた。

友だちと対立することは、子どもにとって非常に苦しい経験であるが、幼児期以降の対人関

係の発達において重要な課題であることは、これまでも多く述べられている。友だちとの対立の土台にあるものは、遊びや友だちに対する思いの深まりという、子どもたちの育ちであることを改めて理解し、こうした育ちを支えるよう支援していくことが大切だといえる。

カテゴリー② 友だちと対立するエピソード

No.2 「K太の仲間入りを断るY男とN介」

(4歳、男児)

Y男とN介は最近よく一緒に遊んでいる仲良し2人組。この日も2人は、教室の真ん中にダンボール箱を置き、机に見立て折り紙で遊んでいる。すると、「いーれーて」と、K太が声を掛けてきた。Y男とN介は、「2人しかいません!」と言って、K太の仲間入りを断る。2人は再び机に向かうと、ひそひそ話をしたり、折り紙を教えあったりして楽しそうに遊んでいる。あきらめられなかったK太は、2人の中に入れてもらおうと、今度は2人が持っているのと同じ、折り紙を持ってきて、いれてと言う。それでも2人は、「だめ!」と断わる。今度は四つんばいになって2人の周りをぐるぐる走り出すK太。「ピカー!」とピカチュウになりきって近づいてくる。すると、Y男とN介はおもしろそうだとK太に興味を持ち、近づき、自然に3人のポケモンごっこが始まっていった。

(省察)

仲間入りでの葛藤場面。何度断られても2人の遊びに入ろうと試行錯誤しているK太の思いは、おもしろい遊びを提案したことで叶えられていく。Y男とN介は、2人だけで遊ぶ、ということに、かなりのこだわりを持っている。仲良しの友だちを独占したい、2人で遊ぶことが心地よくて仕方ない気持ちがあるのだろう。K太の仲間入

りを何度も断った2人だが、最後には、「ポケモンごっこ」を通して3人で遊び始める。2人きりで遊ぶことも好き、興味が引かれるようなおもしろい遊びもやりたい、そのような2つの思いがあるからこそ、「2人きり」というこだわりを捨て、自主的にポケモン遊びへと移って行くことができたのではないだろうか。

③自分の遊びに夢中になる

ひとり遊びに夢中になる姿も、4歳児の大きな特徴である。自分のお気に入りの遊びに集中して取り組み、満足のいくまでじっくりと遊び込むことで、子どもたちは自分に自信をもち、次の活動への意欲を育てていくようだった。また、ひとり遊びに夢中になって取り組み、魅力ある作品をつくり上げた友だちをみて、周りの子どもたちもまねをしたり、教えてもらうなど、友だちとのかかわりが自然に生まれていく様子もみられた。ひとりで遊ぶことが得意な子どもの中には、仲間とかかわることが苦手で、そうせざるを得ない場合も考えられるが、周りの子どもたちが近づいてみたいと思うような遊びを生み出したことをきっかけとして、仲間関係が広がっていくことも予想され、一人ひとりのこだわりや、得意とすることを深めることができる人的・物理的環境づくりの重要性が示唆された。

カテゴリー③ 自分の遊びに夢中になるエピソード

No.19 「「ひとりでやりたいの!」最後まで自分でやりたいA美」(4歳、女児)

教室の床に寝転がってパズルをはじめたA美。しばらくすると、E子が近づいてきてA美に声をかける。「いっしょにやろうー」しかし、A美は、「いいの、ひとりでやりたいの!」と、E子が入ってくるのを

断った。A美は最後にはパズルをひとりで完成させ、観察者のところへ出来上がったパズルを見せに来た。「ひとりでやったんだよ！」すごいねえと言って拍手すると、満足そうな顔を見せる。A美は完成させたばかりのパズルを片付けると、E子のいるごっこ遊びをしている集団へ元気よく入っていった。

(省察)

友だちのE子が嫌なわけではないけれど、自分の力だけでやり遂げたい、というA美の思いが伺える。パズルを完成させると、あっさりとは片付けてをしているところから、ひとりで黙々と取り組んだA美の遊びへの要求が十分満たされたと考えられる。その後E子のいるごっこ遊びへ入って行く姿から、ひとりでパズルを完成させたいという思いだけでなく、E子と繋がりたいという思いもあったのではないだろうか。また、満足するまで遊び込み、自信を得ることは、次の遊びへの意欲へとつながっていくことも示唆された。

④友だちの魅力に気付く

4歳児では、友だちの作品や技に対して、「すごいね」「かわいいね」「強そうだなあ」など、言葉で褒めるような声掛けをする姿がみられた。仲良しの友だちと一緒に遊ぶ中で、友だちに魅かれる。たまたま近くで遊んでいた友だちの作品のおもしろさに魅かれ、近づき、褒めるような声掛けをしたことがきっかけで、一緒に遊び始める。友だちの魅力に気付く、認めることは、仲間関係を広げ・深めていく一要因となること示唆された。

4歳児にみられた友だちを褒めるという行為は、子どもの自己の発達を基盤としていると考えられる。自分ではない他者の存在を認識し、自分自身を客観視しながら、他者と比較してい

るからこそ、友だちのよさに気付くことができ、言葉で褒める行為に至るのだろう。

また、友だちを褒めるという行為は、子どもの自尊感情とも密接に関連していることも示唆され、自身の友だち関係や遊びが充実し、満たされているからこそ、子どもが友だちを褒めるという行為をみることができたといえる。友だちに褒められた子は、うれしくて、さらにおもしろい遊びを考えたり、さらには、褒められてうれしい気持ちを味わうことで、自分自身に満足し、今度は自分から他者を認める言葉かけを行うようになることも予想される。子どもたちが友だちの魅力に気付く、かかわりをもつ土台として、保育者によって一人ひとりの子どもたちが受け止められ、自分の存在や、クラスに居ることへ安心感を持てることが重要であるといえる。

カテゴリー④ 友だちの魅力に気付くエピソード

No.15 「「強そうだなー」づくり方を教えてもらったK介」（4歳、男児）

N斗の隣でブロックをしていたK介。ふと、N斗の方を見ると、N斗の作ったバイクを見つけて声を掛ける。「強そうだなー、どうやってつくったの？ ねえ、つくって！」 N斗は、ひとつひとつ組み立てながら、「こうやって、こうやって……」と説明する。K介はじっと説明を聞きながら、N斗の言うとおりにつくっていく。お揃いのバイクが出来上がると、K介はうれしくて、「ここバイクの競走場にしようよ！」とにこにこしながら提案する。「もう寝る時間だから」と、バイクの競争は断られてしまったものの、「本当に寝るぞ！」と言って、N斗が寝るふりをする、K介もうれしそうに「おれも寝るぞー」といって、並んで寝転がる。

(省察)

K介がN斗のつくったバイクを「強そうだなー」と褒めたことがきっかけで、遊びが生まれていく場面である。N斗のバイクに魅力を感じ、N斗に伝わる言葉で褒めるところは、4歳児ならではである。強そうな、かっこいいバイクを作ることができて、うれしい気持ちになると、今度は、うれしい気持ちをもたらしてくれたN斗と一緒に遊ぶことに関心を移し、楽しそうに遊び始めていく。

⑤認められたい気持ちをもつ

観察の中で、子どもたちが何度も、保育者に「みて！」と声をかける姿がみられた。「みて」ほしいものは、ブロックの作品や、踊り、コマの回し方や、うんていをする自分の姿など、場面によって様々だった。保育者に「みて」もらうと、子どもたちは、満足そうな顔をして、再び自分たちの遊びへ戻っていく。

子どもの「みて」ほしい対象としては、一生懸命つくった作品や、うんていの端から端まで渡れるようになった自分自身の姿など、自分が満足いくまで取り組んだことをみてほしい、認めてほしい、褒めてほしいという思いが予想される。また、これはおもしろい！と、子ども自身が心を動かされたもの（自分でつくったものや、歌・踊りなどの表現、自然事象など）を「みて」ほしい場面では、一緒にみて、共感してほしい思いがあることが伺える。保育者に「みて」と言った子どもたちは、その後の保育者の反応をよくみていた。保育者がどのような反応をみせるのか、自分にとってうれしい反応をしてくれることを期待しているようにもみえる。

子どもたちの「みて」ほしい思いが、保育者によって受け止められることは、自分を客観視して、自分と友だちとを比較するようになるといわれる4歳児にとって、大きな意味をもつと

考えられる。魅力のある友だちに囲まれ、自信が揺らぐ経験をしながらも、自分自身で満足できた取り組みについて認めてもらえることは、確信のある自信へと繋がっていくことが示唆され、やがて友だちとかわろうとする意欲を育むと考えられる。

カテゴリー⑤ 認められたい気持ちをもつエピソード

No.35 「自分で発見した駒のまわし方をみてほしいJ也」(4歳、男児)

4歳児クラスで、駒回しが一大ブームになっている時期があった。教室のあちこちでいっせいに駒を回し、友だちとの競争を楽しんでいる。駒回しは、駒の後ろの円錐の部分に細い紐を巻いていく、手先の器用さや慎重さが求められる難しい遊びである。J也は、みんなと同じように紐を巻くことができず、それでも楽しそうに遊ぶ友だちの中に入りたくて、いつも駒を持っていた。保育者は、そんなJ也の為に紐を巻かなくても回る駒を用意すると、うれしそうに遊ぶようになった。この日、J也は、いつものように駒を回して遊んでいると、突然「先生、みてー！」と呼びかけた。保育者が見に行くと、駒の側面を床につけて、手で勢いよく回す、というものだった。J也は、自分の発見した新しい回し方を保育者にみてほしかったようだった。保育者に「おー、新しいね、すごいねー」と褒められて、J也はうれしそうに、再び駒回しの研究を始めた。

(省察)

軽度の自閉症の診断を受けていたJ也。お着替えや給食の準備など、友だちよりも1歩遅れて、それでも毎日一生懸命こなしていた。J也は、みんなと同じように駒を回すことに憧れ、保育者によって、その思

いが叶えられると、駒を回すことへの思いを一層強めたのだろう。いつもと同じように駒を回しているように見えたが、実は、自分だけのおもしろい回し方を何度も試していたようだった。おもしろい回し方が発見できると、大きな声で保育者を呼んでいる。J也にとって、保育者は自分のことをいつもみていてくれる、認めてくれる存在だったのではないだろうか。保育者に認めってもらうことで、自分に自信を得ると、駒回しへの思いをさらに強めていったようである。

IV まとめ

4歳児は、仲間と共に遊ぶことを通して、協同することで遊びの質が高まる経験や、友だちと言葉や物を共有する心地よさを味わうなど、仲間と遊ぶことのよさを自分なりに感じているようである。一方、友だちと遊ぶことは子どもにとってうれしい・楽しいことばかりではない。遊びが目覚しく発達する4歳児にとって、遊びへのこだわりから思いがぶつかることも増え、また友だちへのこだわりから対立する場面も多くみられるようになる。しかし、このような苦しい対立を乗り越え、再び友だちとかがわろうとするバイタリティーもまた、友だちとのかかわりによって支えられているといえる。幼児期において、仲間と共に楽しい、うれしい経験を繰り返し、仲間に対して肯定的な感情の基盤を培うこと、またこうした感情を基盤として、自分の力で対人葛藤を乗り越える経験を繰り返すことは、生涯発達において対人関係に意欲をもって取り組むことのできる力の基盤となることが示唆された。

また、入園したてで不安の多い3歳児だけでなく、仲間との遊びを繰り返すようになる4歳児においても、保育者の存在は重要な役割を担

っているようだった。友だちとのかかわりを通して、友だちの存在に気付き、自分と友だちを異なるものとして認識するようになると、自分と友だちを比較する場面がみられるようになる。子どもたちは、できない自分、友だちより劣っている自分に気付き、自信が揺らぐ気持ちと常に隣り合わせにいるといえる。そのような中で、保育者によって、できたことを認められ、がんばりたいことを後押ししてもらうことは、自信の揺らぎを支える糧となるようだった。

幼児期の仲間関係は、集団を経験することによる育ちだけでなく、ひとり遊びにみられるように個々の子どもの育ちが密接に関連し、発達していくということを改めて認識し、支援を考えていく必要があるといえる。

引用・参考文献

- 吉川はる奈 (2008) 学級と学童保育で行う特別支援教育 ちょっと気になる今どきの小学生, 金子書房, 110-125, 西本絹子編
- 松丸英里佳, 吉川はる奈 (2009) 3歳児の仲間関係の形成過程に関する研究, 埼玉大学紀要, 教育学部, 58 (1)
- 高櫻綾子:「幼児期の仲間関係に関する研究の動向」, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 46, 259-267 (2006)
- 中澤潤:「進入幼稚園児の友人形成:初期相互作用行動, 社会認知能力と人気」, 保育学研究, 98-106 (1992)
- 柴田利男:「幼児における社会的コンピテンスの諸測定間の相互関連性とその個人差」, 発達心理学研究, 4 (1), 60-68 (1993)
- 遠藤辰雄, 井上祥治, 蘭千尋:『セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求』, ナカニシヤ出版, 78-84 (2004)
- 文部科学省 (2001)「少年の問題行動などに関する調査研究協力者会議報告」

(2009年3月27日提出)

(2009年4月17日受理)

Research on developing process related to four-years old child's companion in kindergarten life

Erika MATSUMARU and Haruna YOSHIKAWA

Keywords : companion relation, four-years old child, observational research, developing process

There are a lot of people who point out uneasiness to the appearance that the grade-schooler plays with the friend. It is because it tends to become a one-sided relation of attacking the other party well in the self-control, and it is difficult to understand mutually.

“Companion” is the one that the age is in the vicinity, the body, psychologically, and socially in a similar standpoint with oneself. It is said that mutual negotiation with the companion will play a major role for the children's social development.

The purpose of this research is to do the observation investigation of the four-years old children who begins to be actively related with the companion, and to clarify the developing process of the peer relationship. It is based, and the suggestion of the development of child's interpersonal relationship in the puerility and youth is obtained.

The feature of the process of formation of four-years old child's peer relationship is as follows. 1) They feel goodness that play with the friend. 2) They conflicts with friend. 3) They concentrate on their play. 4) They notice the charm of the friend. 5) They want to be admitted.